

私の愛する…

堀内運送(株) 堀内 健輔

私の愛する「鮎の友釣り」

みなさんは、長い竿を持って、真夏の川の中に立っているおっちゃん達を見かけたことがあるでしょうか?その一人が私です。なにもポーッと突っ立っているだけではなく、あれは鮎の友釣りという日本固有の釣りなのです。鮎は、初冬に河口付近で孵化し、冬を海で過ごし、早春に川に遡上してひと夏を過ごし、晩秋に産卵するといういわゆる年魚です。夏になると、石に付くコケを主食としているので、良質のコケが付く石に縄張りを持つのです。その縄張りの中に、掛け針をつけたオトリ鮎を忍び込ませて、喧嘩させて引っかけるという釣りです。友釣りといっていますが、どちらかというと喧嘩釣りです。

私が、鮎釣りというマニアックな釣りにのめり込んだのは、親父の影響でした。親父もかなり鮎好きだったので、それに休日ごとに引っ付いていき、小学生になるころから、夏の遊び場はずっと川でした。上流域の川には鮎やアマゴ、オイカワ、カワムツ等のたくさんの魚種がいます。その中で、子供にとっては、鮎は王様であり、アマゴは女王様的な存在なのです。真夏は、川に潜って鮎やアマゴを観察しながら、いつかは親父と同じように鮎釣りをしてみたいと憧れたのは、自然な流れだったのではないのでしょうか。そして、あのころに水中眼鏡越しに見た鮎の動きや、経験から学んだ急流の中での体の動かし方などが、間違いなく現在の釣りに生きていていると思っています。

こうして考えてみれば40年以上も、鮎釣りを続けていることになります。自分でもよく飽きないものだと思いますが、この歳(53歳)になっても、解禁日の前夜は、ワクワクして寝付けず、いわゆる遠足前の小学生状態になっています。好きが高じて、近畿圏の主な河川はもとより、鮎の名川といわれる岐阜の長良川、富山の神通川、高知の四万十川、熊本の球磨川、秋田の米代川、珍しい所では、長崎県対馬の仁田川、北海道の尻別川など全国各地に足を伸ばしてきました。よくどこの川が一番良い?と聞かれることがあるのですが、これは、それぞれの良さがあると思っています。標高高い溪流河川も村の里川も町中の大河川も、本当にそれぞれの顔を持っていて、それを見つけることも色々な河川に行く楽しみの一つになっています。それと鮎という魚は、間違いなく市民権(村民権?)を持っています。よくその土地の爺様たちが、「うちの川の鮎が、日本一美味しい!」と、自慢げにおっしゃいます。おらが川の自慢の鮎というところでしょう。民宿に泊まって、そういう話を聞きながら、自分で釣った鮎のなかでの選りすぐりを炙っている時は、私の中で非常に大切なかけがえのない時間になっています。



神通川の鮎 大漁!



四万十川の大鮎

数ある釣りの中で、なぜ鮎釣りにこれだけハマるのか?鮎釣りは、人口の少ないマニアックな釣りなのですが、ハマっている人は、それはそれは見事に深みにハマっています。釣りが、やや技術的で面白いというのがありますが、それだけでは無いと思っています。日本には四季があり、鮎釣りシーズンは、初夏から初秋までと限られており、冬と春は鮎釣りができません。そのオフシーズンの期間に、鮎釣り師達は妄想するのです。来るシーズンに向けての仕掛けを手作りしながら、「この糸を使えば、この針を使えば、入れ掛りに違いない!」と妄想するのです。そして期待感一杯の半年間待ちに待った解禁日を迎えるのです。いったん竿を持って川に立てば、鮎釣り師達の頭の中は、野鮎がどこにいるのか?の想像でいっぱいになっています。この流れには、この石には、野鮎が縄張りを持っているに違いないと想像しているのです。それが想像通りになったときに、破顔一面となるのです。鮎釣りは、オフシーズンの妄想とオンシーズンの想像が、入り混じって、なかなか抜け出せない奥の深い釣りになっているのだと思っています。

これだけ長く、そして一生懸命に、鮎釣りをやっているの、私の中では、すでに趣味という領域を超えていて生活の一部になっています。NO FISHING, NO LIFE (釣りの無い人生なんて考えられない)を、これからも続けていこうと思っています。そして今回、「私の愛する鮎釣り」と、これだけ自信をもって言えるものを、教えてくれた今は亡き親父に改めて感謝しております。